

最近の国際的な地球情報管理

International geoinformation managements to date

古宇田 亮一 [1]
Ryoichi Kouda[1]

[1] 産総研
[1] AIST

<http://www.aist.go.jp/>

最近の国際的な地球情報管理は、国境を越え、分野を越えた連携がうねりとなっている。各国内の地球に関連した様々な情報を発信する機関や企業の情報提供と管理等のサービス提供には明らかな特徴が見える。時間経過的に辿ると、次のように回顧できる。

1) 集中 分断型情報管理：各国や企業ないし事業所単位で、各々、データベースマシンを孤立集中的に運用管理し、計算機資源とソフトウェア（ミドルウェア）が独自に追求され、予算規模に応じて様々なソフトウェアとデータベース管理が乱立、国内の統一にも問題があり、国境を越えた相互運用性は考えにくかった。これによって、全般的な社会コストは増大した。

2) ネットワーク接続ができる相互運用型情報管理：インターネットの活用が高度化することによって、漸次的に情報の一部が公開され、クリアリングハウスも普及、XLM などによる補完的な標準が形成された。各国の GIS システムが商用の ArcGIS でほぼ統一されるなど、結果的に分散型の相互運用性が拡充してきた。しかし、特定のソフトウェアベンダーに頼ることで維持コストが上昇し、システムが向上するほどコスト負担が大きくなった。

3) ここ数年で、フリーの WEB-GIS などの整備が進み、各国や各企業・機関等による独占的な情報群島（Information islands）にからみとられていたものが部分的に開放され、連携して相互運用することのメリットを認める動きが加速されてきた。そのため、新たに国際標準が様々に提案されている。

4) WEB 上で公開されたデータベースのうち、安価または無償の供給が増えるにつれ、それらを活用したサービス型コンテンツビジネスが姿を現そうとしている。今後、どのような将来像が描かれるかについて展望したい。